

撰集抄

新院ノ御基讃州白峯ニ有レ之事

過にし仁安の比。西国はるぐ修行つかまつり侍りし次に。
讃州見を坂の林と云所に。しばらく住侍りき。深山
山辺のならの葉にて。庵りむすびて。つま木こりたく山
中のけしき。花の木ずえによする風。誰とへとてかよぶ
こ鳥。よもぎのもとのおづら。日終にあはれならずとい

ふ事なし。長夜のあか月。さびたる猿の声を聞に。そゝ
ろにはらわたを断侍り。かゝる栖は後の世の為としも侍
らねども。心そゝろにすみておぼゆるにこそ。かくても
侍るべかりしに。うき世の中には。思をとゞめじと思侍
りしかば。立はなれなんとし侍りし程に。新院の御墓
所をおがみ奉らんとて。白峯と云所に尋参り侍りしに。
松の一村しげれるほとりに。くぎぬきしまはしたり。是

ならん御墓にやと。今更かきくらされて物も覚えずまの
あたり見奉りし事ぞかし。清涼紫宸せいりやうししんの間にやすみし給
て。百官にいつかれさせ。後宮後房こうきうこうぼうのうてなには。三千
の翡翠ひすいのかんざしあざやかにて。御まなじりにかゝらん
とのみ。しあはせ給ひしぞかし。万機のまつりごとを。
掌たなごころににぎらせ給のみにあらず。春は花の宴を専にし。
秋は月の前の興つきせず侍りき。あに思きや。今かゝる

べしとは。かけてもはかりきや。他国たこく辺土へんどの山中の。お
どろのしたにくち給ふべしとは。貝鐘かいかねの声もせず。法華ほつけ
三昧まいつとむる僧一人もなき所に。只峯みねの松風のはげしき
のみにて。鳥だにもかけらぬありさま。見奉るにそゞろ
に涙なみだを落し侍りき。始はじめあるものは終りありとは聞侍りし
かども。未かゝるためしをば承うけたまはり侍らず。されば思を
とむまじきは此世なり。一天の君きみ。万乗ばんじやうのあるしも。し

かのごとくの。苦みをはなれましく侍らねば。せつり
もしゆだもかはらず。宮もわらやも共にはてしなきもの
なれば。高位かうゐもねがはしきにあらず。我等もいくたびか。
彼国王ともなり給ひけんなれども。隔生きやくしやうそくまう即忘して。す
べておぼえ侍らず。只行てとまりはつべき。仏果ぶつくわゑんまん円満の
位のみぞ。床ゆかしく侍る。とにもかくにも。思つゝくるまゝ
に。涙のもれいで侍りしかば。

よしや君昔きみむかしの玉の床とことても。

かゝらん後はなにゝかはせん

とうちながめられて侍りき。盛衰じやうすいは今にはじめぬわざな
れども。ことさら心驚おどろかれぬるに侍り。さても過ぬる
保元ほうげんの初の年。秋七月の比をい。鳥羽とばの法王ほうわうはかなくな
らせ給しかば。一天村雲迷むらくもて。花の都みやこくれふたがり侍り
て。含識がんしきのたぐひうつゝ心も侍らず。なげき身の上の

み。つもりぬる心地どもにて。おはしましゝ中に。僅わづかに
十日のうちに。主上しゅじやう上皇くわうの。御国あらそひありて。上
を下にかへし。天をひゞかし地をうごかすまで。乱みだれたゝ
かひ侍りて。夕に及て。大炊おほいどの殿に火かゝりて。黒煙くろけぶりお
ほへりしに。御方みかたは軍勝いくさかつにのり。新院の御方いくさやふれの軍破て。
上皇うぢ宇治さふの左府御馬に召て。いづちともなく落させ給し
を。兵者つはものをつかけ追懸奉りていさゝかも恐おそれ奉らず。射いまいらせ侍

りしを見たてまつりしに。よしなき都に出てと返々心う
く侍り。さて後にこそうけたまはりしが。新院はある
山の中より求出もとめし奉て。仁和寺へうつらせ給。宇治左
府は。矢に当あたらせ給て。御命いのち終らせ給ぬれば。奈良の
京。般若野はんにやのの五三昧まいに。土葬どさうし奉りけるを。勅使ちよくしたち
て。死がひ実験じっけんの為に。堀ほりおこし奉けると承うけたまはりしにあ
はれ六借世かしきの中かな。誰か知ざるうき世はかゝるべしと

は。ことにあやうくはかなき身もちて。したりかほに
のみ侍りて。むなく明暮過て。あけくれ無常の鬼にとらるゝ時。むじやう
声をあげてさけべども叶かなはずして。悪趣にのみ経めぐり侍
らんは。いとゝかなしかるべし。盛衰じやうすいもなく。無常も
はなれ侍らん世なりとも。仏の位目出度と聞たてまつら
ば。などかねがはざるべき。況や盛衰はなはだしきをや。
無常すみやかなるをや。たゞ心をしづめて。往事わうじを思給

へ。すこしも夢にやかはり侍ず。よろこび悦も歎なげきも。さかんなるおとろふる盛も衰も。
みな偽いつはりのまへのかまへなるべし。